

1. 目的と計画

(1) ヴァッサー大学教育現地調査 2009年11月17日—20日

報告者は、08年9月にヴァッサー大学の教育について現地調査を行い、教育システム(カリキュラム、学生指導体制、進路、教育設備等)の現地調査を行った。これをふまえ、一般教育科目および専門科目の授業参観(参与観察およびインタビュー)を行うことにより、リベラルアーツ・カレッジとしてのヴァッサー大学の教育実践を学ぶ。

(2) 北米中東学会年次大会の「Teaching Islam in Comparative Perspective」(米国社会科学研究評議会主催)のパネルに参加し、本学での授業実践を報告するとともに、海外と連携した中東イスラム理解教育の可能性をさぐる。 2009年11月21日—22日

2. 研修活動

(1) ヴァッサー大学教育現地調査

ヴァッサー大学では、歴史、国際関係、スーフイズムなど、7つの授業を聴講した。いずれも、充実したもので、ひとつとして退屈なものはない。教員は、講義開始時間前に教室に現れ、定時に開始される。学生は、指定されたテキストや論文を予習してくるので、授業はいきなり、質疑や討論から始まる。以下、まず、聴講した授業の様子をレポートする。

11月18日(水)

①Hiraku Shimoda, HIST-224-01 Modern Japan, 1868-Present (歴史学)

歴史学の中級の授業(2-3年生)で、受講者は20名(うち女性14)。今日の主題は、「メディアと記憶」。NHK「プロジェクトX」の「革命トイレ市場を制す」のビデオを解説をつけながら上映。「挑戦者たち」というタイトルで製品開発などに挑んだ社員の姿を表にだす試みであり、新しいタイプの民衆史、として位置づける。受講者は、3本の参考テキスト(プロジェクトX、NY Timesの記事Ugly Images of Asian Rival became Best Sellers in Japan, Tessa Morris Suzuki, The Past within US)を事前に読み、「メディアと記憶」について討議。下田先生は、ヴァッサー大学を卒業し、ハーヴァード大で学位取得ののち、2005年からヴァッサー大教員となり授業を担当(日本史および東アジア史)している。授業後のインタビューは下記のとおり。「授業中の討議は評価の一部(15%)にしている。テキストを読んでいない、あきらめている、などの理由で発言しない人もいる」「歴史を専攻する学生は、高校時代から歴史がすきだったというタイプと、特定の地域(たとえば日本)に関心をもっている場合とがある」

②Yu Zhou & Himaadeep Muppidi, ASIA-218-01 Global Asia (アジア学)

政治学、宗教学、文化人類学などの5人の担当教員による実験的授業。受講者15名、ラウンドテーブル。NY Times(2009/11/17)のRise of Chinaについての記事を巡る討論。中国、インド、日本などを例に、資本主義や個人主義の伸張と文化・宗教の固有性の関係を討論。抽象論ではなく、具体的な事実や情報を提示しながらレベルの高い議論が進み、一瞬大学院のゼミではないかとの錯覚するほどだった。授業後、受講学生2名(シンガポール生まれの日本人および韓国人留学生)にインタビュー:「一 Semester で 6-10冊の本を読む、主題は、What is global Asia?。最初

は手をあげられなかったが、慣れた」。

11月19日

③Sarita Grgory, POLI-170-01 Political Theory (政治学&初年次用)

初年次向けFreshmen Writingの授業を兼ねる。受講者は12名(女性4名)。シラバスでは、「理念がいかに政治行動へと導くかに焦点をあてることで、政治学理論を学ぶ、ペリクレスやアリストテレスからマルクスやムッソリーニまでを取り扱い、liberalism、republicanism、conservatism、Marxism、fascism、environmentalismなど様々なイデオロギーを解釈することで、ideaとideologyの違いを理解する」とある。ケニアの環境保護運動Green Belt Movement家でノーベル平和賞受賞者であるMaathai のビデオを上映し、3つの問いを提示(What makes tree planting political? What makes Maathai 's tree planting movement? Can the Green Belt movement exist without Maathai ?)して、討論。最後に黒板に概念を整理、Maathaiには、Conservative-Radical, Feminist/Liberation-Pragmaticの二つの軸線が絡んでいたことを整理する。成績評価は、質問箱20%、試験30%、レポート20%、政治理論Lexicon10%、課外活動経験10%、平常点10%。授業後のインタビュー:「3年前から授業をもつ。授業準備は大変、Vassar Moodle に、予習テキストをアップするだけでなく、予習用の質問箱Weekly Quizesを設定し、また、Lexconという形での用語説明づくりを課すことで知識をつけさせている。」

④Margaret Leeming, RELI-255-0 Sufism (宗教学)

受講者8名(女性7名)。Muhammad Krigdの*The Tawacores* (改悛)という小説を用い、著者がスーフィズム(イスラム神秘思想)をどのようにとらえているかという観点から質疑が進められた。後半は、期末レポートについて、自由論題open end research paperと4つのテキストを批判的に読解するレポートの2種類を提出することを説明し、受講者は各自のとりあげるテーマを述べた。

授業後のインタビュー:「学生は、宗教学Majorだけでなくいろいろ混じっている」「今回の授業で小説を用いたのは、学生の固定的なイスラムイメージを壊したいということと、個人的に小説が好きだということから」

⑤John Lott, HIST-217-01 History of Ancient Romans, (歴史学)

受講者31名(女性13名、パソコン使用者8名)。最初にレポートの文献についての説明、必ず二つ以上の文献にあたるのが条件。ローマ時代の奴隷についての史料(主人を殺害した奴隷についての弁論、英語訳)を配布し、当該史料から奴隷の状況について何が読み取れるか?を討議(学生は事前に読んできている)。学生からは、「多様な奴隷の存在(富裕な奴隷もいる)、奴隷のなかで社会関係ができている、都市民衆との関係、奴隷への恐れ・・・」などの答えが次々にあがる。最後に、論点を整理して終了。AV機器などは用いないオーソドックスな講義ではあったが、年配の教員の語り口に説得力があり、学生はずっと集中していた。

⑥Pinar Batur, INTL-106-01 Perspectives/International Std (国際学)

受講者37名(女性21名)。テーマは、"Revolution: Iran and the Middle East"で、課題図書は、サトラピー『ペルセポリス』(邦訳あり)など4点。「政策としての戦争と平和」の例として、ブッシュ前大統領のイラン・中東政策を取り上げて質疑。Batur教授は中東政治を専門とする。学生の意見を引き出しながら「米国を守らなければいけない必然性は?」「経済からみると?」など質問を投げ

かけながら、論点を黒板に整理「21世紀の課題①イデオロギー対立②経済がらみの政治＝石油③領土④リーダーシップ」。最後まで活発に手があがったが、大人数のため時間切れとなった。授業後のインタビュー：「受講生の1/3程度は国際学Majorであるが、残りは様々。多くは1－2年生。毎回の講義で3本程度の文献予習を課している。学生から意見がでるように意識的にリードしている」

11月20日

⑦Schreier, Joshua, HIST-214-01 Root Palestine-Israel Conflict (歴史学、国際学)

受講者21名(女性13名)。馬蹄形の階段教室で、学生との質疑がし易い新式の教室である。Schreier先生の講義は昨年も聴講し、オーケストラの指揮者を思わせる、熱のはいった学生との質疑応答ぶりが印象的だった。今回の授業のテーマは「オスロ合意からバラク政権へ」。オスロ合意が主題だが、オスロ合意のプロセスや内容はいっさい説明せず(学生は予習している)。その歴史的位置づけをめぐって、質疑・討論が交わされ、「peaceの始まりであり、fragmentationの始まりでもあった」というまとめで終わった。ホットなテーマであるためか、議論も白熱し、教員に堂々と(食ってかかるように)議論を挑む学生の姿が印象に残った。授業の最初の問いかけは「生物は進化するか?」という意外なものでこれは、進化論をめぐるイデオロギー対立を例に各自がもっている無自覚なバイアスを認識するための導入であった。授業後のインタビュー：「受講生のMajorはさまざままで、理系Majorの学生もいる、履修希望者が多いので、同じ内容で二つのクラスを設けている」「あの教室はとても気に入っている」

<全体の印象とまとめ>

眠っている学生は皆無。討論でも、学生同士がよく意見を聞きあうし、形だけの議論ではなく、真剣さが感じられた(とはいえ、私には学生の早口英語の内容がよく聞き取れないのだが)。日本の講義中心(知識の伝達、とはいえ「すぐに忘れる」とは大違い。授業がおわると、私自身が、運動をして体を動かしたような快感を感じた。まさに頭の運動。

日米の大学授業の違いはなにか、ヴァッサー大学の教員ともはなしをした。

制度のことでいえば、ヴァッサー大はMajor-Minor制をとっているため、いずれの授業も特定の学科(Major)の学生がしめることはなく、自分で授業をえらんで「参加」する。また、ある教員は「学生には授業にparticipateせよ」というとのことで、日本の「学生はお客さん」とは大違い。米国のリベラルアーツ・カレッジは専門性が低い、という揶揄を日本でできくことがあるが、私には、ヴァッサー大学の中級の授業が大学院レベルにみえた。

以上を日米の授業比較としてまとめればつぎようになる。

- ①定時に始まり、定時に終わる。75分の授業に集中する。
- ②シラバスで、目標、15週(週2回)の授業内容(教材含む)や成績評価方法を明示。
- ③学生は、指定の図書、論文(ウェブ)で予習。Lexicon, Quizもあり。印刷配布物はほとんどなし。
- ④授業の中心は、質疑・討論。どんどん手が挙がる、学生同士が傾聴。「参加型」。←→知識中心の日本の大学の講義
- ⑤学生は必至にノートする。板書も併用。眠らない。
- ⑥学生も教員も授業を精選・集中(1セメスターに4-5科目の履修)。履修学生は多様。
- ⑦期末レポート = 小論文。主題と参考文献の両方から構想する。

⑧全寮制、教員も近住。

⑨厳格な成績評価と学生による授業評価

ヴァッサー大学は少人数教育のリベラルアーツ・カレッジであることに教員も学生も存在意義を見いだしている。もちろん米国のすべての大学の授業がこのようであるわけではなく、大規模大学では大人数の講義も多いという。またヴァッサー大でも授業運営がうまくいっていないクラスもあるという。米国の大学教育に両手を挙げて礼賛をするわけではないが、正直なところ、日本の大学教員・大学生はこのままではいったいどうなるのか、国際社会で互していけるのか、と我が身を含めて心配になった。

なお、研修訪問期間中に、日本学コースでの授業（菅聡子先生の日本文学、お茶大大学院生による日本語の授業）も聴講した。日本語の授業では、お茶大の大学院生（留学生）がヴァッサー大学学生を相手に授業を行ったが、よく練った教案にもとづき、笑顔で楽しそうに授業をしていたことが印象的だった。また、18日夜には、お茶大とヴァッサー大学日本学学生とのテレビ会議授業が行われ、日米のイメージのギャップについて、意外な発見にみちた授業が行われた。

最後になるが、ヴァッサー大学での授業聴講には、日本学科の土屋治美先生がすべて当該教員に連絡をとって、許可をいただいた。多忙ななか、アレンジをしてくださった土屋先生に記して謝意を表したい。

（2）北米中東学会年次大会の「Teaching Islam in Comparative Perspective」（米国社会科学研究評議会主催）のパネル。北米中東学会は、北米に限らず、ヨーロッパ、中東、東アジアの会員も多く、その年次大会は、200近くのパネルが生まれ1000名くらいの参加者がある。米国社会科学研究評議会では、2001年以降、中東・イスラーム理解を進めるための調査研究を、各国の中東学会と連携して、継続的に行っている。今回のパネルは、米国、ロシア、中央アジアでのイスラーム研究の最新動向が報告され、私は日本の中東イスラーム理解と教育上の問題点について、コメントを行った。





写真3 Global Asia

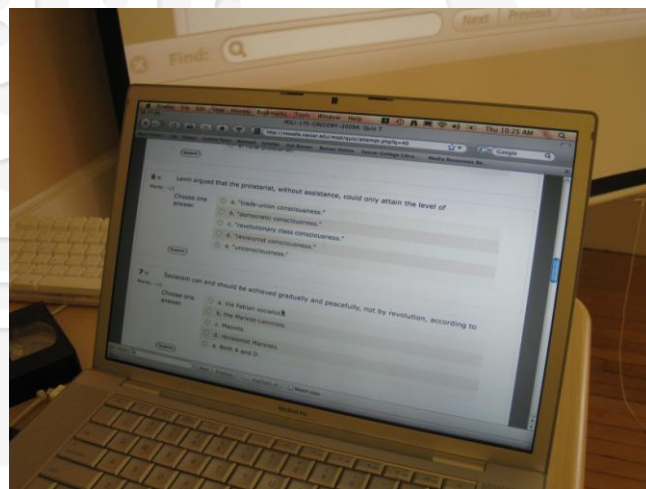


写真4, 5 International Politics



写真6 お茶大とのテレビ会議



写真7 パレスチナ問題